

稲場圭信「ボランティア、利他主義、絆の気づき」、檜尾直樹編『アジアのスピリチュアリティー―精神的基層を求めて』 2006年2月 勉誠出版 166-177頁
第四部 新たな絆の気づき

稲場 圭信

要約文

生活の充実、自己実現、自発性、個人主義などを看板に語られるボランティア活動であるが、継続性がともなう時、ボランティア活動はともスピリチュアルな取り組みとなる。ボランティア活動実践者のインタビューをもとに、日本人の精神的基層にあるもの、他者への思いやり、人と人との絆を探る。

一 問題関心

1 ボランティア

近年、ボランティア（ボランタリー）活動は、生活の充実、自己実現、自発性、個人主義を看板に日本にも定着しつつある。しかし、ボランティアを支える思想である個人主義は他者への配慮をともなった個性化であり、多くのボランティア活動の実態は、利己主義とは馴染まない社会活動である。個性化は他者との差異化により生じ、その差異化は集団へのコミットメント、関わりという社会性があってはじめて形成される。従って、本質的にボランティア活動は公共性とその公共性の中に見え隠れする個々人の自発性という両面をもっているはずだ。

ボランティア活動が個人的な趣味や自己利益と結びつけて論じられることが多い。ボランティアの数を増やすための賢い戦略と言えようか。しかし、個人的な趣味や自己利益のみをことさらに強調することは現実を無視した、あるいはボランティア活動の経験がほとんどない者の観念的な言説である。ボランティア活動に多少なりとも参加したことがある人ならば、きっかけや動機が自己利益のためや個人的な趣味であったとしても、継続的に活動に関わるならば、そのような個人的な希求を中心に活動を展開することは事実上不可能であることを実験として理解している。

パラドキシカルではあるが、むしろ個人の自発性やニーズと他者のそれらとの出会い、折衝、調和というようなプロセスを体験することが、個人的で自発的なボランティア活動がもたらす重要な産物であろう。その意味で、ボランティア活動における気づきは、とてもスピリチュアルなものと言える。そして、それは、おそらくスピリチュアリティーの要素の中でもとりわけ日本的な（あるいはアジア的な）ものを多分に含んでいると考えられる。

2 日本人の精神的基層

日本人の文化的価値・対人関係において、集団と個人概念に代わるものとして、濱口恵俊は間人主義という概念を提唱した（『日本らしさ』の再発見』日本経済新聞社、一九七七）。日本人にとっての間人観は、自分と他人といったとらえ方ではなく、対人関係の中に内在化された「間人」であるという。間人主義は、相手を自分と別の人格をもった

「個人」として見なさず、自分との関係でとらえ、また、自分自身も相手との関係でとらえる対人的な相互の連関性をもつ。また、会田雄次は和辻哲郎の論を踏襲し、「察し」と「思いやり」を日本人に独自のコミュニケーションのあり方としてとり上げ、日本は思いやりと相手の立場になって考えることによって成り立ってきた国と主張している（『日本人の意識構造』講談社、一九七二）。さらに、島菌進は、近代日本人の道德意識を「和合倫理」という語で概括している（『救いと徳』弘文堂、一九九二）。「和合倫理」とは、「和」「和合」「調和」に最大の価値を置く道德意識であり、集団の個々人が誠意や善意を持ち、その時その場の状況と関係に応じた態度を取ることであり、調和と一致の状態が実現すると考えるのである。

一方で、現代社会の個人主義的傾向や私生活主義に対して、上記のような視点からさまざまな批判がある。日本人の「思いやり」の気持ち比以前に比べて減ったという指摘である。しかし、単純にはそのように結論づけることはできない。現代社会では、共同体の崩壊だけでなく、交通網の整備と高度情報化により見知らぬ他者の存在が増加した。かつての共同体では、まったく見知らぬ他者がすれ違うことはまれであり、見知らぬ者同士が肩をあわせて並んで座ることなどあり得なかった。まったくの見知らぬ人は共同体の外の人であり、日常的には出会うことのないよそ者である。かつての共同体はそのような他者に対して思いやりはなく、排他的であった。一方、現代社会において、かつての共同体生活では日常的に出会うことがない見知らぬ他者、つまりはかつての共同体にとってのよそ者がまわりに溢れている。そして共同体が崩壊してしまった現代社会では、「相手の気持ち」を思いやり、尊重する心」が大切と説くことはできても、それを育む場、人と人とのつながりがないのである。ボランティア活動はそのような場となる可能性を持っており、そして、それはとてもスピリチュアルな取り組みだと筆者は考えている。

3 利他主義

世界保健機関は、一九九八年に健康概念の三つの柱、身体的（physical）、精神的（mental）、社会的（social）に、あらたにスピリチュアル（spiritual）を加えることを検討した報告書を作成したが、そこで議論されたスピリチュアルの項目に、見返りを期待しないで他者に親切にすること、他者を受容すること、無償の愛など、利他主義に関係するものがある。

「利他」は元来、他者を思いやり、自己の善行の功德によって他者を救済につとめることを意味する仏教用語であり、利他主義とは、自己の利益ではなく、時には自己を犠牲にしてまでも他者のために起こす行動や他者を思いやる態度である。近年、哲学や思想分野だけでなく、動物行動学や遺伝子学などの諸分野で利他主義という語が使用されている。利他主義の反対概念である利己主義を個人の善を目的とした行動義務と解釈したり、人間の本性が自己の利益だけを追求するようにできていると捉え、利己主義を擁護したりする立場もある。また、利他主義の内的要因として、自己満足、自尊心、罪の意識からの解放などが指摘される。そのような内的要因を含まない純粹な利他主義が存在するか否かというような不毛な議論を避けるために、筆者は、「社会通念に照らして、困窮あるいは不利な状況にあると判断される他者の援助を目的とし、自己の利益が主たる目的ではない行動」と行動論的に利他主義を捉えている。

日本のスピリチュアリティには利他主義に加えて、日本人の精神的基層にある「和」「つながり」「思いやり」といった要素が強く存在していると考えられる。この論稿では、二〇〇三年一月から二〇〇四年一月にかけて、兵庫県にある高齢者をサポートする二つの団体のボランティアとスタッフ計二〇名におこなったインタビューをもとに、そのような日本のスピリチュアリティの特質の側面、とりわけ絆の気づきに迫ってみたい。なお、本稿に登場する人々の名前は本名と関係のない仮名である。

二 感謝と無償性

1 おかげさま

漠然とした感謝の気持ちを表わす言葉として「おかげさま」がある。言葉にしなくとも、そのような気持ちからボランティア活動に踏み出す人もいる。大阪に住む鈴木太一さん（五〇歳代）のボランティア活動もそのような気持ちからはじまった。鈴木さんは阪神淡路大震災の時から現在の高齢者を訪問・移送するボランティア活動を継続している。

妹が神戸だったんですよ。妹も震災でマンションが半壊位の認定を受けたんですけども。まあそれ以前にぼくが心臓手術をしたんですよ。手術をやる時に、子ども小さかったんで断つたら先生が「あんたこの歳までには手術せんかったら死んでしまうよ」と、命の期限をつけられたわけですよ。それでも思い切ってやって、一応助かったんですけどね。それで、助けてもらったお礼っていったらアレなんですけども、まあなんか役に立つことがないかなあ思ってたら地震があつて、妹がおつて。妹のところへいって、その後になんか他にお手伝いがないかなあいうことで。

製造業で働いていた鈴木さんは、以前はボランティア活動や慈善活動にまったく興味が無かった。中学一年生の時に父親が亡くなり、鈴木さんは母親一人に育てられた。「貧しかったんでね。周りのこと考える余裕無かったですね。生活としては。」ところが、心臓の手術後に気持ちの変化があつた。「助けてもろただけで平々凡々と生きとつていいんかなあ。せつかく助けてもろた命やから、なんか役に立つことないかなあ。そういうこと考えるようになりましたね」とボランティア活動をはじめた頃を回想する。

玉木キクさん（七〇歳代後半）は、チャリティ用リサイクル商品の値段つけというボランティア活動を続けて一年ほどになる。以前は、他者のために活動をしたことは一切ないという。

生活いっぱい、なんでそんなもん。助け合いは昔は確かにあつた。そりやまあ隣保、隣組ゆうて。戦前よ。戦後はちがう。戦後はもう個人主義。自分が生きていくのに一生懸命や。あの苦しさは経験した人間やないと。あの苦しさから無事ここまで来れたんやから親のおかげやと思つてる。今頃になつてね。死ぬ前になつてやつと親の有り難さがわかつてきた。それと、周囲のね。

2 物質・金銭を超えて

スピリチュアリティを構成する一要素として、物質的な価値や金銭の非重要視が指摘されることがある。もちろん、自給自足が困難な現代社会で生きていくには物質とそれを手に入れるための金銭が必要である。しかし、スピリチュアルな人は、そういったものに深

く執われず、他のものに満足を見つけ出す。その意味で、鈴木さんは非常にスピリチュアルな人といえる。

高収入も確かに魅力ですけどもね。収入ばかり追うとったんでは、人間らしい生き方はできへんのちゃうかな、とそういうふうに考えましたね。今はリストラで会社辞めてから無職なんですよ。障害あるからなかなかね。就職もないし。いま嫁に食わしてもらってるんですけども、嫁がボランティアに理解があつたんで、現在までできてる。

阪神淡路大震災を契機に、ボランティア活動をはじめた平井啓子さん（五〇歳代）は、夜はパートで病院に勤め、昼間はボランティア活動をしていた。しかし、ボランティア活動をはじめて五年目、病院のパートを辞めた。

パートでわずかな給料もらってもなんやから、それやったらお金に関係なくボランティア活動やってみようかなと思って、それでどっぷりと浸かってしまった。お金に代えられない何かがあるなど。お金で縛られるよりは、拘束されるよりは自分の自由に行ける方がいいなと思って。それと主人の理解。

お金が入る仕事をやめて、自分の時間を人のために使う、その原動力はどこにあるのだろうか。平井さんはいう。

お金に代えられない人とのつながりというか、いろんなことを見せてもらったり聞かせてもらったり人と会ったりして、いろんなものを吸収できるじゃないですか。それが自分のために、人格完成と言ったら大げさですけど、やっぱり自分のためになってる。言葉ではわかってるけど実践でなかなか難しいじゃないですか。でもそれが試されてる。こういう時は怒りたいけど怒れないとか。自分もヘルパーの資格も取ったんだけど、どっかに登録してお金じゃなくて、自分から進んで、喜んでできること。仕事となったら当たり前になってしまいうけど、自分はお金をもらってない。気持ちも楽しんでできるじゃないですか。お金に縛られたら楽しくない。

三 継続の原動力

1 自然体

鈴木さんは、週一回、この団体で高齢者訪問・移送ボランティアを行い、近所の老人ホームへ週三回ほど顔を出す。

仮設住宅の循環訪問ね、お年寄りとか障害者の方たちの様子伺いというカタチで、もともと入ったんですね。それが自然とずっと続いて、仮設がなくなつて、復興住宅に転化されました。その時に、いままで仮設で話しとった人が復興住宅行ったから、ちゃんとした生活できるから「さよなら」というのが、僕の性格ではできなかつたんですよ。で、復興住宅へ変わつても様子を見に行つて、それが自然とまたずっと。

一度築いた人間関係を大切にし、一時的な親切心ではなく、継続するのが鈴木さんの生き方の方である。小学校六年生の時には、同じ組にいた小児麻痺の子の送り迎えを卒業までの一年間続けた。継続のこつは「自然体」のようだ。

「ボランティアやってんねん！」と肩に力入ってやるとたぶん長続きしないです。どこかで切れますね。そういう場合は。なんでかこう、知らん間にもう九年ですから。いっぺんにボーンと出てもうたんでは長続きしないですね。最初は浅くやって徐々に深くしていくという。深くしすぎると今度はちよつと、入り込んでしまうという問題があるんで、どこで区切ってやるかが一つの課題。

2 信仰

スピリチュアリティの要素には、何かを信じるといふものが含まれる場合がある。それが特定の信仰、宗教であることもあろう。そして、ボランティア活動をする上での基本姿勢に影響を与えることもある。平井さんがそのケースである。平井さんが小さい時、両親は町内会の世話などをしていたが、「普通のサラリーマン家庭で慈善活動などは特に何もしてなかった」という。人助けや親切な行いをしなさいというような家庭教育も特に無かった。しかし、結婚後の宗教的な影響があるという。

お姑さんが入った仏教、A会というところ、主人もその教えをしてたから、自然と入った。お姑さんが病気で倒れたから私が代わりに会費納めたり、お世話をしたり。そしてお姑さんの看病。三年か四年ほど経って、すごい嫌やな思っつて、看病して帰つてきては泣いて、主人に当たつてたんだけど、これはちよつと違うなあと。これじや私何のために宗教をやっているんやろなあと思つたりとか。楽しくせなあかんなど。主人を悲しませてはいけないとか。そういういろんな葛藤があつて、心の切り替えをその時にした。喜ばれることするんだつたら周り悲しませたらいかんし、主人のお義母さんだから嫁姑問題もやめようとか。そこでその時に心入れ替えて看病生活を再開することができた。やっぱり教えの影響は大きいです。

家庭の中から社会へ出ていくボランティア活動の実践は「報恩感謝」であり、「人格完成のためには奉仕活動いふのを実践しないとダメ」という平井さんにとって、信仰はボランティア活動を継続する上で大きな支えになっている。

宗教がなかったら、行き詰つてたかもわからない。不満が出てたかもわからない。やっぱり、人の陰口とかなんとか、行動とか言葉とか、教えなかったらしてしまうし、感謝で受け止められないし、きつと不足言つてることが多かつたと思う。でもそれが感謝に変わったり、それが有難く自分の体験になつて。自分で変えられるということが、軌道修正できるのが宗教だと思つて。羅針盤みたいな。

3 楽しみ・喜び・人とのつながり

鈴木さんは病気をして、しばらくボランティア活動を休んだことがある。その時、別のボランティアが、高齢者の訪問を続けた。

休んでる分、一緒に行つてる人が代わりに行つてくれてるんですけどね、その一緒に行つた人に、「あの人どうしてんねん」と、僕のことを反対に心配してくれるんですね。そやからやっぱり元気になつて治つたらまた行かなあかん、と。向こうから元

気をもらうことができましね。こっちからちよつとでも元気あげたいな、とかね。

高齢者のお世話をしたり、パソコンを教えたりするボランティア活動をはじめて三年になる古屋英美さん（四〇歳代）は、「ここでの出会いがほんとにすごく楽しくて。家には味わえないような、いろんな方もいて。また学生時代に戻った気持ちです。ほんとに仲間って感じですよ。」と楽しそうに話す。尾形順子さん（五〇歳代）も同じく、楽しさと喜びを語る。

楽しいんですよ。それに、やっぱり少しは役に立ってるかなという考えがあるからだと思うんですよ。誰も私の代わりにいくらでもしてくれる人いるんですけどね。やっぱりそういう喜びがあります。「明日休むねん」言うたら、お年寄りの方が「えーっ、休み？」と言うてくれるとね、嬉しいですよ。やっぱり待ってくれてるんだったら嬉しいなあとおもってね。

楽しみと喜びは人とのつながりにある。梶田朝子（四〇歳代）さんはボランティア活動をはじめて八年になるが、辞めようと思ったことはないという。

やっぱりやっていくうちにスゴイしんどいのもいっぱいあって、悩んだりとか泣いたりとかいろんなことがあったんですけど、こられた方の笑顔をみたら、喜んでくれる人がいるんだったら頑張ろう、というのでずっと。一緒にやってる仲間たちもみんな気持ちは一つになってたから、やっぱり一緒にわかってくれてる人たちがいっぱいいるというので乗り越えてこれたのかな。

四 学びと成長

ボランティア活動には学び、気づき、成長がつきものという指摘がある。あらたな活動を通して、新しい自分を発見したり、経験により認識力と行動力が高まったり、人間関係の中で自分の心の器が広がったり、さまざまである。

梶田さんは、現在のボランティア活動においてリーダー的な存在の一人であるが、最初は「自分が感動しながら」ボランティア活動をしていたという。そして、さまざまなことを乗り越えて「やっているうちにいろんな問題が見えてきた」のだという。

自分で必死にパソコン勉強して、パソコン教室を立ち上げて、パソコン教室をやっているうちに、パソコンというのは障害者にこそ大事なもんやな、というのがわかってきた。じゃあ障害者のパソコン教室ということで、また視覚障害者の音声パソコン入れたりとかいうことで、自分でどんどんと問題というか、今本当に足りないものは何々かな、とか、そういう問題意識みたいなものが出てきた。自分たちがやりたいことだけじゃなくて地域のニーズをちゃんとつかんでやっていかないといけないな、とかいうことで。そういうような感じでまた見れるようになってきて、自分のやりたいことだけじゃなくなって、やらないといけないことが増えてきたかな、ということがあるんです。まあ今までだったらそういう時でも、やらないといけない、でも私らはできないから無理やな、とか思ってたことも、協働ということ、私らのできないことでも地域の人たちに呼びかけたらできると思うようになってきた。

阪神淡路大震災で、北村勇一さん（五〇歳代）は、商売をしていた店を失った。

地震ですべて崩壊した時に全国各地から救援来ましたよね。一般のボランティアの車も非常に目立ってました。当時私西宮住んでまして、「頑張れ西宮」と書いた横断幕を張った車が走ってた。家の前でどうしようかどうしようかと立ち尽くしている時に、そういうボランティアの車が通るわけですよ。涙出ましたね。そういう時ですから、感動を覚えました。それがきっかけになったと思います。自分も何かやらないと、と。

以前はまったくボランティアとは無縁だったという北村さんだが、区役所の広報紙をみて、ボランティア活動をはじめた。そして、「ありがとう」の言葉に喜びを感じた。「商売で『ありがとうございます』とか人のやりとりはありましたけど、ボランティアで障害者・高齢者の支援をした時は、本当に喜んで頂けるんですよ。それがやっぱり嬉しかったかな」と活動をはじめた頃の喜びを話す。「ありがとう」の喜びは、いまでも続いているという。そして、自分自身の心の成長や変化に言及する。

今、自分がものすごく変わっていったらと自覚してるとは、僕短気だったんですよ。しょっちゅう衝突してた。とにかく短気でした。物事を決め付けることいっぱいありましたけど、今はほとんど。活動を通して自分自身が変わった。違う自分が出てきてるんですね。あ、俺ってこういう部分があるんかと。

鈴木さんの気づきは自分自身を超えて、社会全体、時代を担う青年にも向けられる。

いずれ誰もが誰かの世話になる時が来るんですよ。その為にもやっぱり人にね、他人と思わんと。身内いうたらちよつとあれなんで、親戚かなあとかね。まず、人類はほんまもう一つや、とか、大きく言えばですよ。そんな気持ち持たんと。わが道を行くだけでは社会生活やろう思ってたかなかなか難しい思いますよ。みんな友達やろー思ってたたらこれが一番手っ取り早いですよ。そういう考えをもてれば、たぶん戦争も無くなると思うんですけどね。

五 ロールモデル

ロールモデルとは、役割モデル、お手本、模範となる人というような意味である。人は成長過程において、様々なロールモデルから学んでいる。ボランティア活動を始める直接のきっかけでなくとも、他者への思いやりや親切心をロールモデルから基礎として学んでいる場合もある。あるいは、ボランティア活動の中で、新たなことをロールモデルから学ぶ場合もある。前者は親であり、後者は身近な先輩であるケースが多いようだ。

1 親の背中

前述の梶田さんの小さい頃、母親はとても親切な人であったという。

寝込んでる人がいたらその人の下の世話とかね、そんなことしてるのは見てました。ただ母がいつも大便とかそんなんのお世話をしてたから、なんか「イヤやな、私はそんなんしたくないな」と思っていました。私はしたくないけど母は偉いな、というのは

思っていました。

この団体でのボランティア活動を始めて一年に満たない田丸圭一さん（二〇歳代）は、学生時代にもボランティア活動を経験している。

大学に入った時というのは、漠然と他人の役に立ちたいとか、もしくは両親が教師ということがあり、バックグラウンド的なものですね、お金のために働いているんじゃないというか、教師職業というのはビジネスと別のイメージがあつて。大学に入ったらボランティアをしたいと思つていた。するものかどうか、自分のために生きるのではなく、何かこう二四時間あるなら他人のために自分の時間を使うことを当然と思つていたというか、そういうもんだらうなと思つていた。

しかし、両親から、特にそのような教育をうけたことはない。

他人のために立ちたい。自分のことだけに使うのは満足にならない。自分の満足を越えた上つていうのは他人に満足してもらうというのがあつたと思うので、それはなぜかと言われると、教育的なもの、まあ自然と見てきたものもあるでしょうね。親が仕事の上で残業手当ももらえずに部活に土日に顧問として出て、遅く帰ってきてという姿を見ていた、というのはあると思います。背中ですかね、特に何か聞いたこととか、社会的な影響というものはなかったと思います。

2 身近な先輩

自分自身の心の成長に気がついている北村さんは、高齢者の生活支援に献身的なボランティア活動をしているリーダーの米田久子さん（五〇歳代）の姿に「なぜここまで深く関わっていくんだらうなあ」「すごいことだなあ」と感動したという。そして、米田さんのようになりたいと思つている。

早川貴代子さん（五〇歳代）も、スタッフとして高齢者の生活支援をしているが、最近、高齢者に問題行動があると、「この人どうしてこうするんだらう」と考え、「アーここに原因があつたんかなあ」と、高齢者の気持ちや立場を考えるようになった。今までは自分の立場ばかりで考えていたのが、相手の立場になつて考えるようになり、そのように実践したら、腹が立たなくなつたという。早川さんの気づき、成長にとって米田さんの影響が大きいという。

米田さんは、もう第一に、お年寄りを大切にしておいて、一人ずつよく見て、その人に対処していきます。米田さんと一緒に数ヶ月活動して、徐々に徐々に、まだまだダメですけどね、私の気持ちも変わってきましたよ。腹が立たないということだね。私は米田さんのおかげやと思つてます。でも、まだまだですよ。米田さんから見れば、あたしなんかまだまだですよ。米田さんを目指してがんばりたいと思います。

六 むずび

ボランティア活動における目的の特質としては、公共性、利他性、福祉性などが、活動

形態の特質としては、連帯性や継続性があげられる。また、ボランティア活動を実践する上での留意点として、相手の思いを確認するコミュニケーションの重要性がある。これらのほとんどが本稿に登場するボランティアの語りに現れていた。そこには、日本人の精神的基層にある「和」「つながり」「思いやり」といった要素が、「おかげさまで」「一緒に活動する仲間たちがいるから」「待っていてくれる人がいるから」「喜んでくれる人がいるから」という形で存在する。とりわけ人との絆が重要なようである。

ボランティアであるということは、喧伝されるような自己実現や生活の充実という面だけでなく、潜在的に傷つきやすい面を内包している。正義感や責任感から燃えつきてしまったり人や理想と現実の乖離に悩まされる人も多い。そのようなボランティア活動を継続する上で、仲間の存在、人と人との絆が重要なであろう。

ボランティア活動には学び、気づき、成長があり、人とかかわりうちに自分自身が変わったというケースが多い。思いやりの心を持ったロールモデルと出会い、活動を通して豊かな心と思いやりのある人格を形成する。その意味で、ボランティア活動はとでもスピリチュアルな取り組みである。

参考文献

- ・ 会田雄次『日本人の意識構造』（講談社、一九七二年）
- ・ 稲場圭信「シェアされるスピリチュアリティと意識変容」「ロールモデルと社会化」伊藤雅之・檜尾直樹・弓山達也編『スピリチュアリティの社会学』（世界思想社、二〇〇四年）
- ・ Keishin Inaba, *Altruism in New Religious Movements*（大学教育出版、二〇〇四年）
- ・ 金子郁容『ボランティア——もうひとつの情報社会』（岩波新書、一九九二年）
- ・ 島菌進編『救いと徳』（弘文堂、一九九二年）
- ・ 濱口恵俊『「日本らしさ」の再発見』（日本経済新聞社、一九七七年）